様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３４３２０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７８０３４９

研究課題名（和文）本質主義的信念が集団間葛藤に影響を与えるプロセスの解明

研究課題名（英文）Investigation of the processes underlying intergroup conflict: Function and impact of psychological essentialism

研究代表者
浅井　暢子（Asai, Nobuko）

京都文教大学・総合社会学部・准教授

研究者番号：３０５５２４９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：社会集団の多くは恣意的な分類であるにもかかわらず、人々は集団の間に遺伝子のような本質的違いが存在すると錯覚することがある。本研究では、こうした本質主義的信念が集団認知及び行動に与える影響を実験と調査によって検証した。内・外集団に本質的差異の存在が知覚されると、両集団に関する知識がなくとも、自分自身を含む内集団成員と外集団成員の間に、あたかも性質的な差異が存在するかのように知覚される「集団間差異の幻想」が生じることが明らかになった。本研究では、本質主義的信念と集団内及び集団間行動の直接的な関係は見いだされなかったが、集団間差異の幻想は、外集団への偏見、葛藤を生み出す十分な原因となると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The bases for social categories should be regarded as arbitrary in a logical sense. However, people often believe that members of a certain category share certain inherent essences. The present study conducted experiments and a survey to investigate the impact of such “essentialist” beliefs on group perception and interpersonal behaviors. The results revealed that, even in the minimal group situation in which participants had no information about individual in- and out-group members, essentialist beliefs about groups induced perceived intergroup differences in traits. Although no impact of essentialist beliefs on intergroup and intragroup cooperative behaviors was demonstrated in the present experiment, illusory intergroup differences induced by essentialist beliefs would sufficiently trigger intergroup prejudice and conflicts.

研究分野：社会的認知

キーワード：心理的本質主義　集団間関係　成員認知　集団間差異の錯覚　非協力行動

１．研究開始当初の背景

国際化と多様化が進む現代では、様々な集団に所属する人々の協力と協調が、安定した社会の構築には必須の課題である。その一方で、社会の中には、特に偏見を抱かれやすく、集団間葛藤の当事者となりやすい集団が存在する。

特定の集団に偏見が抱かれやすくなる原因のひとつは、集団の間に遺伝子や血などの本質的な違いがあると信じること、すなわち本質主義的信念にあると考えられる。たとえば、民族は、本来、社会的・文化的特徴の共有によって人々を区分した、いわば恣意的カテゴリーである（e.g., Neblett ら, 2011)。しかし、人々はしばしば、ひとつの民族が、目に見えない本質的特徴を共有しているかのように錯覚し、他の民族と明確に区別しようとするのである（本質主義的信念: e.g., Haslam ら, 2000)。

このような本質主義的信念は、集団間の性質違いを説明づける根拠として機能し、極端なステレオタイプや偏見の形成を促すことがわかっている（Asai, 2011)。

従来の本領域の研究は、偏見やステレオタイプの形成過程の解明を主な目的としていたため、『自分が所属していない集団についての“認知”』に、本質主義的信念が与える影響を検討するにとどまってきた。すなわち、偏見や集団間葛藤を生じさせたり、助長する要因となる、①所属集団（内集団）とそれ以外の集団（外集団）の違いに関する認知に本質主義的信念が与える影響や、②本質主義的信念と集団間行動の関連は解明されていない。

そこで、本研究では、『所属集団と他集団という文脈における本質主義的信念の機能』に着目し、“集団間認知・行動”との関連を実証的に検討することとした。本研究は、直接的には、集団間関係を悪化させる心理的過程を検証するものであるが、得られた知見は、現代社会に必要な集団間の協調関係を引き出す施策に対しても示唆を与えると考えられた。

２．研究の目的

本研究では、社会集団の間に、遺伝子や血などの本質的な違いが存在すると信じることが集団間葛藤を喚起・助長するメカニズムの解明を目的として、本質主義的信念が(1)所属集団と他集団の性質の違いの認知や(2)他集団への行動に与える影響を実験と調査から検証した。

３．研究の方法

（１）本質主義的信念が集団認知に与える影響に関する実験研究

①本質主義的信念の強さと集団認知

実験参加者を無作為に 2 つの集団に分け、集団間に本質的違いが知覚される程度を操作することで、同知覚が集団間の性質的差異の認知に与える影響を実証的に検討した。実験参加者は、大学生 262 名（男性 107 名，女性 155 名)であった。

②カテゴリー化の基盤に関する信念と集団認知

上記の実験①では、内・外集団間に本質的差異が知覚さえる程度を操作したが、本研究では内集団と外集団というカテゴリーが本質的差異に基づくものと知覚させる条件と社会文化的差異に基づくものと知覚させる条件を作り出し、集団認知への影響を比較した。実験参加者は大学生 86 名（男性 44 名，女性 42 名)であった。

（２）人間の「性質」と本質主義的信念の関連の検討

Medin ら（Murphy & Medin, 1985; Medin & Ortony, 1989）は、遺伝子のような生物学的要因、すなわち本質が表れやすいと認識されている性質とそうではない性質があることを理論的に指摘している。しかし、これまでの研究では、本質が人間の性質に与える影響を人々がどのように「理解」しているのかは体系的に検討されてはいない。そこで人間の性質の発現と生物的要因の関連についての認識をインターネット調査(2015年3月実施; 回答者 416 名: 男性 208 名、女性 208 名; 平均年齢 39.61 歳）によって検証した。

（３）本質主義的信念が内・外集団成員への行動に与える影響の実験による検討

本質主義的信念が、内・外集団成員の性質認知を超えて、相手への行動にまで影響を与えるかという問題を実験によって検討した。本実験では特に相手への「協力行動」を取り上げ、内・外集団のカテゴリー化の基盤として「生物学的要因」を知覚させる条件と「社会・文化的要因」を知覚させる条件を設定し、内・外集団成員への行動を比較検討した。現在、追加実験の実施を予定しているが、報告書作成時点での実験参加者は、大学生 100 名(男性: 45 名，女性: 55 名)であった。

（４）総合考察

報告書のまとめとして、本研究で得られた知見を総合し、本研究の成果及び今後の展望について述べる。

４．研究成果

（１）自他集団の性質認知に本質主義的信念が与える影響に関する実験研究

①本質主義的信念の強さと集団認知

実験では、まず参加者に自分自身の特性(例.直感的： ①はい/ ②いいえ）と社会的意見（例.少年犯罪の匿名報道: ①賛成 / ②反対）について二肢選択法で回答を求めた。

その後、絵の選好課題を課し、各自を無作為に「色中心知覚タイプ」と「形中心知覚タイプ」に分け、各知覚タイプに関する架空の Web ニュース記事を提示することで、両知覚タイプ、すなわち内・外集団の間に本質的違

いを知覚する程度（低 / 高）を操作した。続いて、各知覚タイプの人々について、先の質問で各選択肢を選ぶ人の割合を合計 100%の範囲で推測してもらった(例．直感的：はい 20% / いいえ 80%)。なお、自分と同じ知覚タイプの人が内集団成員、自分と違う地殻タイプの人が外集団成員にあたる。

内・外集団の間に本質的差異を知覚した程度を本質知覚-低条件と高条件で比較したところ、本質知覚-高条件の方が有意に高く、本質知覚の操作が有効であったことが明らかとなった。

続いて、内集団と外集団における「選択肢①を選択する人の割合」の推測値を従属変数として、2（自己の回答：① / ②）×2（推測対象：内集団 / 外集団）× 2（本質知覚：低 / 高）の分散分析を行ったところ、3 要因の交互作用及びその傾向が認められた(Fs (1, 258) > 2.86, ps <.09)。

外集団認知に関しては、集団間の本質的差異の知覚を促した場合、こうした知覚を抑制した場合と比較して、参加者は外集団に自分自身と異なる特性を持つ人が多いと見積もるようになった。その一方で、内集団に関しては、内・外集団のあいだに本質的差異を知覚するほど、つまり、内集団成員との本質の共有を知覚するほど、自分と類似した性質を持つ人が多いと知覚するようになっていた。具体例を挙げると、集団に対する本質主義的信念が強まるほど、「決断力がある参加者」は、内集団には自分と同様に「決断力のある人」が多く、外集団には自分とは逆、つまり「決断力がない人」が多いと推測していた。こうした効果は、成員の特性に関する推測にのみ認められ、各集団成員が持つ社会的意見の推測では本質知覚は一貫した影響を与えていなかった。

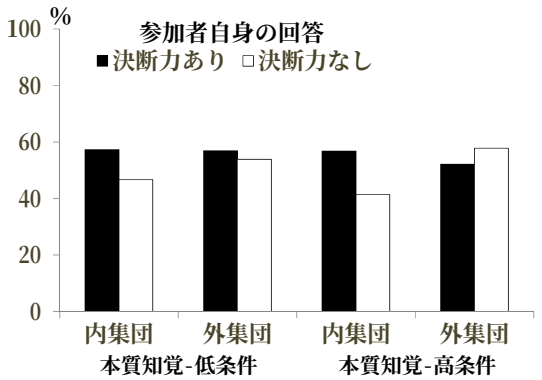

図1　決断力がある人の割合の推測値

②カテゴリー化の基盤に関する信念と集団認知

実験方法は、「内・外集団のカテゴリー化の基盤」の操作を除いては、上記実験①と同様であった。カテゴリー化の基盤の操作は、知覚タイプに関する記事を用いて行い、内・外集団を本質的差異に基づくものと知覚させる記事と社会文化的差異に基づくものと知覚させる記事を呈示した。

得られたデータについて、内集団と外集団における「選択肢①を選択する人の割合」の推測値を従属変数として、2（自己の回答：① / ②）×2（推測対象：内集団 / 外集団）× 2（カテゴリー化の基盤：社会文化的差異 / 本質的差異）の分散分析を行った結果、３要因の交互作用及びその傾向が認められた（Fs (1, 82) > 3.28, ps <.07)。

具体的には、内・外集団の間に本質的差異が知覚されると、社会文化的差異を知覚した場合と比較して、自己と内集団成員の特性上の類似性を強く知覚するようになる一方で、自己と外集団成員の特性的な差異を強く知覚するようになっていた。

社会的意見の分布推測に関しては、実験①と同様に、集団間の本質的差異の操作の一貫した影響は認められなかった。

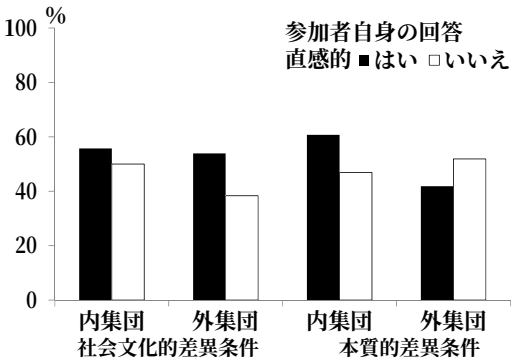

図２　直感的な人の割合の推測値

実験①及び②からは、内・外集団を区別する本質の知覚によって、自己を含む内集団成員と外集団成員の特性次元における類似性知覚が低下することが示された。本実験の参加者が、内・外集団にどのような人が所属しているかという具体的な情報を一切持っていなかったことに鑑みると、集団を区別する本質の知覚は、内集団成員との間に実在しない類似性を知覚させるとともに、集団の間に実在しない違いの知覚、いわば“集団間差異の幻想”を人々に生じさせると言える。

また、本質知覚は、内・外集団における社会的意見の分布の推論に影響を与えていなかったが、これは本質知覚が影響を与えやすい集団認知の領域とそうでない領域が存在することを示唆している。

（２）人間の「性質」と本質主義的信念の関連の検討

調査では、性格特性 36 個（e.g.，協調性、独創性、外向性）、意見・思想 9 個（e.g.，愛国心、集団主義傾向）、身体的特徴 9 個（e.g.，顔立ち、身長）、能力 9 個（知能、国語力）、その他 4 個（e.g.，性的指向、経済状態）の計 67 個の人間の性質に関わる語を提示し、それぞれの性質の決定に生物学的要因が影響すると感じる程度を 6 段階で評定するよう

に求めた。

次に、生物学的要因の影響度の評定値について、性質領域毎に単純加算平均を算出し、一要因分散分析を行った。その結果、人間の種々の性質のうち遺伝子等の生物学的要因に規定される程度が最も高い認識されていたのは、身体的特徴や能力といった物理的な性質であった。次いで疾病と能力、性格特性の順で位置し、最も生物学的要因の影響が弱いと捉えられていたのは価値観や信念といった観念的な性質であった（F (5, 2075) = 156.29, p < .001)。ただし、物理的特性を除き、総じて生物学的要因の影響力はそれほど強くないと回答されていた。この結果については、人々が生物学的要因の影響力が弱いと知覚している可能性を示すとともに、社会的に望ましい回答の希求、例えば遺伝による決定論を表出しない様にとの抑制が働いていた可能性も考えられる。

（３）本質主義的信念が内・外集団成員への行動に与える影響の実験による検討

研究（３）では、先述の実験①及び②で用いた方法を踏襲し、参加者を無作為に 2 つの集団に分け、架空のニュース記事によってカテゴリー化の基盤に関する信念を操作した。具体的には、内・外集団間に生物学的差異を知覚させる本質的差異条件、社会・文化差異を知覚させる社会文化条件、カテゴリーが非固定的なものであるとの情報を示す基盤なし条件を設けた。その後、内集団あるいは外集団の成員を相手として、囚人のジレンマゲームを行っている状況を描いたシナリオを提示し、「各自が資金 600 円を持ち、それぞれが提供した額の 2 倍が相手に渡され、手元に残した額はそのまま互いの取り分となる」とのルールの下で相手にいくら渡すかを記入するように求めた。この提供額を相手への協力・非協力行動の指標とした。

相手への提供額を従属変数として、3（カテゴリー化の基盤: 社会文化的差異 / 本質的差異 / 基盤なし） × 2（相手の所属集団: 内集団 / 外集団） の分散分析を行ったところ、カテゴリー基盤×相手の所属集団の交互作用が認められた（F (2, 94) = 3.39, p = .40)。下位検定の結果、内・外集団の間に社会文化的差異があるとの情報を提示した条件では、相手が外集団の成員であった場合（平均 152.20 円)と比較して、相手が内集団成員であった場合(平均 316.67 円)の方が、より多くの金額を提供していたことが分かった。また、行動の類似性認知に関する評定値を条件間で比較すると、社会・文化的差異条件でのみ、参加者は、外集団成員よりも、内集団成員を自分と行動傾向が似ていると知覚していたことが分かった(F (2,94) = 3.35, p= .40)。これらの結果を総合すると、相手と社会・文化的要因を共有しているとの感覚が、行動規範の共有の知覚を喚起し、相手の協力行動の予測あるいは相手への信頼を生じさせたことで、参加者の協力行動を促したと考えらえる。

その一方で、本質的差異条件では、相手の所属集団によって選択される行動が変化することはなかった。この結果は、生物学的要素の共有・非共有だけでは、相手への協力行動は喚起・抑制されないことを示唆するものである。ただし、本質的差異条件では、社会・文化的差異条件よりも、相手への提供金額にばらつきがみられた。生物学的要素の共有を行動選択の手がかりにする程度には個人差が大きいと考えられる。また、Yzerbyt & Rocher (2002)は、「生物学的要素は、人間の社会性よりも、知性と言った性質をより強く規定している」とのしろうと理論が存在する可能性を指摘しており、本研究で扱わなかった種類の行動、特に非知性的な攻撃行動に研究対象を広げることも必要である。

（４）総合考察

本研究が焦点を当てた本質主義的信念は、特定の集団が厳しい偏見や集団間葛藤の当事者となりやすくなる原因を説明しうる、有力な概念である。しかし、これまでの研究では、外集団に対する認知と本質知覚の関連が検討されるにとどまってきた。これに対して、本研究は、所属集団と他集団という文脈における本質主義的信念の機能に着目し、集団認知と集団間行動への影響を実証的に検討した。

実験的に作り出した一時的な内・外集団を対象とした検証の結果、両集団の成り立ちに関して本質主義的信念が抱かれると、内集団及び外集団に関する知識がなくとも、自分自身を含む内集団成員と外集団成員には、あたかも性質的な差異が存在するかのように知覚される、「集団間差異の幻想」が生じることが明らかになった。こうした効果は、本質主義的信念が、内・外集団カテゴリーの境界線が明確にし、カテゴリー間の差異化効果を強めたこと、また自己と外集団成員の本質的差異の知覚が、「自己」を投影した推測の抑制、さらには自分と異なる特性を持つと積極的に推測することの妥当性や論拠を提供した結果と推測される。また、本研究は、こうした本質主義的信念の効果が、内・外集団の認知全般に見られるものではなく、本質知覚が影響を与えやすい集団認知の領域というものが存在することを示唆している。

本質主義的信念と集団内及び集団間の協力行動の関連の検証では、内集団及び外集団成員との本質の共有及び非共有の知覚が相手との協力・非協力行動の生起とは直接的な関連を持たないことが示された。ただし、現在の研究状況を見ると、本質主義的信念と集団内及び集団間行動の関連についての検証は十分ではなく、本研究が取り上げた協力以外の行動を対象とした検証や、本質主義的信念が行動に与える影響の個人差の検討などが必要と考える。

本研究で示された本質主義的信念が生み出す、集団間差異の幻想は、行動との直接的な関係は見いだされなくとも、相手集団との緊張関係や対立を生じさせる原因のひとつとなる。また、民族や人種といった本質が知覚されやすい集団において、特に偏見や集団間葛藤が生じやすいのは、集団間差異の幻想によるものであることも示唆される。

日本でも、外国人看護師/福祉士の受け入れや、移民政策の再検討が進んでおり、本質的差異を知覚されやすいとされる、他民族、他人種、他国籍の人々との交流が盛んになることが予測されている。本質主義的信念の機能をさらに明らかにした上で、現代社会に必要な集団間の協調関係を引き出す具体的な施策を導き出すことが今後の課題と言える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計６件）

①Asai, N (2014) Impact of Psychological Essentialism on False Consensus and False Uniqueness , 17th General Meeting of the European Association of Social Psychology, Amsterdam, Nederland, July 9-12.

②浅井暢子（2014）本質主義的信念が内・外集団成員の性質推論に与える影響　日本社会心理学会第55回大会　北海道大学 7月26日-27日

③浅井暢子（2015）本質主義的信念と集団間差異の幻想　日本社会心理学会第56回大会　東京女子大学 2015年10月31日-11月1日

④Asai, N. (2016) Psychological essentialism and group perceptions. 31th International Congress of Psychology, 24-29 July 2016, Yokohama, Japan.

⑤浅井暢子（2016）人間の「性質」に関する本質主義的信念 日本社会心理学会第57回大会　関西学院大学　2016年9月17日－18日

⑥Asai, N. (2018) The Impact of Psychological Essentialism on Social Inference. The 2018 Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Atlanta, GA.

〔図書〕（計３件）

①浅井暢子（2015）集団間葛藤の低減　大渕憲一（編）　『紛争・正義・公正の心理学』北大路書房　(Pp. 204-214)

②浅井暢子　(2016)　ステレオタイプ　北村英哉・内田由紀子（編）　『社会心理学概論』　ナカニシヤ出版

③浅井暢子（2018）偏見の低減と解消　北村英哉・唐沢穣（編）『偏見や差別はなぜ起こる？――心理メカニズムの解明と現象の分析』 ちとせプレス　2018年7月刊行

６．研究組織

(1)研究代表者

浅井　暢子　（ASAI NOBUKO）
京都文教大学・総合社会学部・准教授
研究者番号：30552492